

多元参加型学習コミュニティ講座像を学習者の視点でとらえる

—超高齢社会に向けた、パーソナル・キャピタル／

ソーシャル・キャピタルを醸成する成人学習講座を育てるために—

松 田 道 雄
(東北芸術工科大学)

1. はじめに

本論は、超高齢社会を支え担っていく市民（だれもが当事者）を育成する成人学習の在り方について、実践と評価の試みから提案する。今後さらに進展する高齢社会における生涯学習の意義については、「超高齢社会における生涯学習の在り方に関する検討会」（文部科学省生涯学習政策局男女共同参画学習課）が平成24年3月に報告書「長寿社会における生涯学習の在り方について～人生100年いくつになっても学ぶ幸せ「幸齢社会」～」をまとめた⁽¹⁾。そこでは、人生100年を想定した人生設計を計るこれからの超高齢社会は、「社会から支えられる高齢者像」から「地域社会を積極的に支えていく高齢者像」に転換していくことが求められ、それを実現する生涯学習プログラムづくりと運営していくコーディネーター人材育成が提言されている⁽²⁾。本論は、その学習内容の在り方につながる要素を、ミクロな実践の現場から考察提言する。この研究は、筆者のような成人講座を実践する一員が、実践を磨く省察研究⁽³⁾として、成人教育実践研究活性化の一助になることもめざしている。

研究対象の現場は、「だがしや楽校」という活動を成人学習講座の主題に取り入れた杉並区教育委員会主催「すぎなみ大人塾」昼コース「だがしや楽校」講座（次節に説明）の3年間と現在4年目の実践と評価活動である。この実践現場からの先行研究には、ソーシャル・キャピタル（人々のつながり、信頼、規範など）の視点から成人学習講座をとらえる試みをした、拙稿「ソーシャル・キャピタルを醸成する成人学習講座の可能性」⁽⁴⁾がある（以下、本論では「前論文」と表記する）。前論文で提起したのは、以下の仮説である（調査データ数が少ないので今後の研究に向けた仮説とした。本論も同じ調査にもとづく考察なので、前論文と同じく試論的性格になる）。

- ① ソーシャル・キャピタルは、対概念としてのパーソナル・キャピタル⁽⁵⁾とあいまって醸成される⁽⁶⁾。
- ② パーソナル・キャピタル、ソーシャル・キャピタルを醸成する講座要素群を、「新たな人の出会い」を最頻度に確認した。
- ③ 退職者男性、子育て・介護終了女性が、「だがしや楽校」の成人学習講座を通して、パーソナル・キャピタル、ソーシャル・キャピタルを醸成していく過程を、質的調査も含めた混合調査によって明らかにした。
- ④ 「すぎなみ大人塾だがしや楽校」を通して、受講者が「学習媒介者」となって地域住民に影響を与えていく成人学習講座の可能性を示唆した。

本論では、これら前論文の成果を、コミュニティ論、学習変容の過程、学習者からの講座像といった切り口からさらに肉付けして分析考察を深め、新たな成果と次なる研究課題を明らかにしながら、実践現場から成人学習講座の継続的研究を試みる。

2. 多元参加型学習コミュニティ講座の実践と評価活動

（1）「すぎなみ大人塾だがしや楽校」の実践と広がり

杉並区立社会教育センターが実施している「すぎなみ大人塾」は、《放課後》的な成人学習の場として、昼コース・夜コース各年間18回実施され、区教育委員会のHPにも実践記録が公開されている⁽⁷⁾。平成21年度から24年度現在までの昼コースで「だがしや楽校」が学習主題に取り入れられ、筆者は学習

支援者になっている。講座の運営体制は、社会教育センター行政職員2名、学習支援者、学習支援補助者による4名のチーム型で実施し⁽⁸⁾、講座の学習成果記録は受講生によって毎年まとめられている⁽⁹⁾。このような成人学習の記録は「大人の生活綴り」の様相を帯び、今後、時間のゆとりのある高齢世代にとって、大人版『山びこ学校』⁽¹⁰⁾のように作文編集することは、自己の人生知をまとめ次世代に伝えていく高齢者の特質を活かした学習の方法⁽¹¹⁾として有効であると同時に、運営者にとっては学習成果を探る質的評価資料としても重要になると考える。

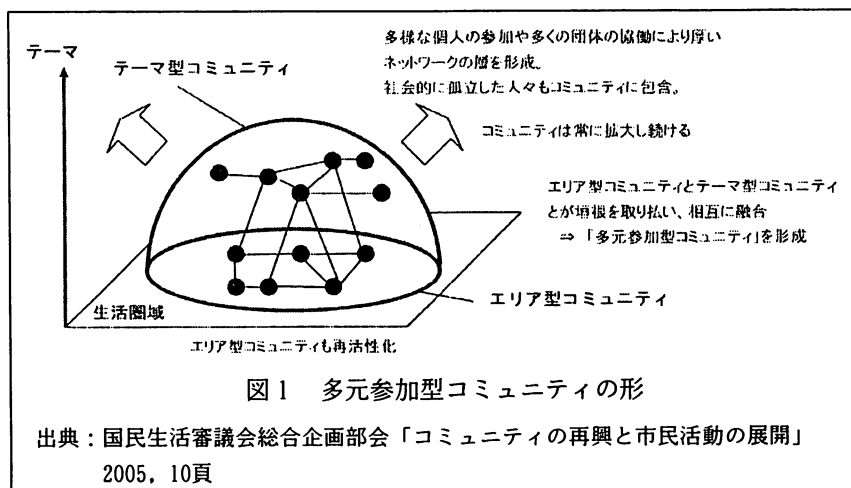
「すぎなみ大人塾」に「だがしや楽校」を取り入れた当時の担当、杉並区社会教育主事・中曽根聡は、自身が保護者と放課後の子どもの育ちを支える教育NPOの立場から「だがしや楽校」を行っており、「すぎなみ大人塾」の目的に通じる共感から成人学習の主題にした⁽¹²⁾。この時の共感とは、人と人のつながりを育むコミュニティの再生である。しかし、「すぎなみ大人塾」と「だがしや楽校」では、コミュニティの形状は異なる。前者は、区社会教育行政事業として、学習した区民によるコミュニティ再生を願い、後者は、一種の市民活動・地域活動やコミュニティ学習などの方法論として全国各地で行われている。

「だがしや楽校」とは、駄菓子屋の研究を通して平成9年に筆者が、店主の高齢者と子どもの互惠関係や「店」を媒介した人間関係性などから導いた活動で、市民だれもが屋台形式に自分の持ち味を「自分みせ」として披露し合い、個々人の活動(媒介物)によって自由に人間関係を紡ぐ集いである⁽¹³⁾。この考えと実践は、その後、学校教育関係、社会教育関係、自治会関係、社会福祉関係、商工関係、市民団体・まちづくり関係、イベント関係など、さまざまな領域で全国的に試みられている。その社会背景は、欧米から生まれたソーシャル・キャピタル論が現在、学際的に広く着目されているのと同じように感じられる⁽¹⁴⁾。

ソーシャル・キャピタル研究者からは、わが国ではソーシャル・キャピタルと教育に関わる研究が少ないという指摘もある⁽¹⁵⁾。しかし、そもそも稲作による集約的農業によって共同体生活をしてきた東アジア・日本地域では、ソーシャル・キャピタルに相当する営みは古くから存在していたという意見⁽¹⁶⁾も考慮すると、「だがしや楽校」もまた、日本的な暮らしにあった人間

関係のつながりづくりによってコミュニティを再生する学習実践として試みられているとも言える⁽¹⁷⁾。

コミュニティの定義は、各時代、各分野でいろいろされているが、国民生活審議会総合企画部会報告書「コミュニティ再興と市民活動の展開」(平成17年)⁽¹⁸⁾では、「コミュニティとは、自主性と責任を自覚した人々が、問題意識を共有するもの同士で自発的に結びつき、ニーズや課題に能動的に対応する人と人とのつながりの総体」と定義している⁽¹⁹⁾。この報告書では、コミュニティを、エリア型コミュニティ(生活圏コミュニティ)とテーマ型コミュニティ(新たなコミュニティ)に分けて考察し、両者を融合した「多元参加型コミュニティ」という形を提言した(図1)。この概念を「すぎなみ大人塾だがしや楽校」に適用すると、「すぎなみ大人塾」というエリア型学習コミュニティの中に「だがしや楽校」というテーマ型学習コミュニティの内容・方法を取り入れた「多元参加型学習コミュニティ」の様相を特色にした講座ととらえることができる。



この講座は、3年間に、全国各地の「だがしや楽校」のつながりを介した住民の交流活動を生み、一方で、住民コミュニティづくりを成人学習によって図りたいと願う他自治体行政担当者によって、「すぎなみ大人塾だがしや楽

校」を参考モデルにした「多元参加型学習コミュニティ」講座が各地で事業化されている。そして、それらの講座を拠点に、地域を超えて運営者と住民の交流学習活動が生まれ、さらに講座を卒業した受講生が自発的に立ち上げたサークル活動なども、他地域と交流を始めている（図2）。

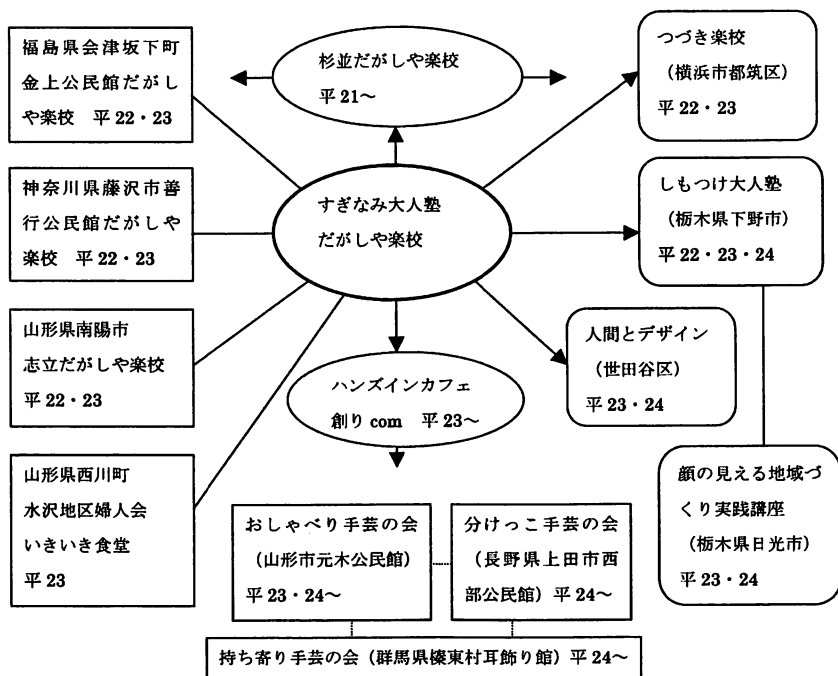


図2 「すぎなみ大人塾だがしや楽校」展開交流マップ
(平成21年度～24年度7月現在)

本論では、「すぎなみ大人塾だがしや楽校」の事例から「多元参加型学習コミュニティ」講座が形成されていく中で醸成されるであろう各人の学習変容過程を探り、学習者（受講者）の視点から「多元参加型学習コミュニティ」講座像をとらえてみたい。

(2) 評価の設計—数量と質の混合評価

本研究では、前論文と同じく、「すぎなみ大人塾だかしや楽校」の年度卒業受講生に依頼したアンケート調査による数量的評価と、自由作文「あの講座が今にどう活かされているか」や図化する表現などによる質的評価を組み合わせた混合評価⁽²⁰⁾によって、学習者の内面の醸成の変容過程を汲み取るとる試みを行う。アンケート調査と作文調査は、「しもつけ大人塾」⁽²¹⁾でも行っている。

コミュニティ論やソーシャル・キャピタル論の研究は、マクロな視点から目に見える活動や結果など数量化できる測定による評価分析が多い。しかし、教育・学習の本質は個人の内面の微細な変容なので、目に見えるマクロな評価だけで内面の変容を明らかにすることはむずかしい。学校教育ではテストによる評価法が確立しているが、成人学習では学習内容の自由度が高い分、評価も自由度が高く、学習者（受講者）の内面からのミクロな変容を明らかにしようとする評価研究は少ない。

教育におけるソーシャル・キャピタル論の総合的な調査研究としては、株式会社三菱総合研究所「平成22年度 教育改革の推進のための総合的調査研究～教育投資が社会関係資本に与える影響に関する調査研究～報告書」(文部科学省生涯学習政策局)が公開されている⁽²²⁾。その中で、社会教育に関わる内容では、資料1のような大局的なシナリオが描かれている。前論文・本論は、そのシナリオへの実践現場からの検証でもある⁽²³⁾。

資料1 社会教育（生涯学習）を通じたソーシャル・キャピタルの
形成・蓄積（シナリオ）

社会教育施設（図書館、博物館、公民館、生涯学習センター等）を活用した学習を通じて、自己啓発やスキルアップが図られるとともに、社会教育施設を活用した学級・講座を介した地域住民間の交流機会が拡充し、相互のネットワークが拡充する。このように、社会教育は、結束型、橋渡・連結型双方のソーシャル・キャピタル形成・蓄積に資することが考えられる。

株式会社三菱総合研究所「平成22年度 教育改革の推進のための総合的調査研究～教育投資が社会関係資本に与える影響に関する調査研究～報告書」文部科学省生涯学習政策局、2011、41頁

資料2 調査変容指標

【A 自分＝パーソナル・キャピタル指標】

- L1 A1 日常生活事象や他者の話からも学ぶ態度。
- L2 A2 他の講座などへの参加。
- L2 A3 新たなことに興味と技能の学び。
- L3 A4 心身の健康。
- L3 A5 人生を肯定的にとらえる。
- L3 A6 新たにやりたいことの発見。
- *1 A7 家族生活の豊かな充実。
- *2 A8 私が学習することでの家族の変化。

【B＋C ソーシャル・キャピタル指標】

【B 人間関係】

- L2 B1 近所づきあいへの関心。
- L2 B2 町会など固定的な集団活動への参加意識。
- L2 B3 新たな人間関係をつくる関心。
- L1 B4 他人や地域を気にかける。
- L3 B5 異なる他者とのつき合い寛容さ。
- L3 B6 人づき合いへの信頼感。
- L3 B7 人づき合いや人間関係づくりのスキル。

【C 社会参加】

- L1 C1 社会への関心と行動範囲の広がり。
- L2 C2 組織的な社会貢献活動への関心。
- *3 C3 新たに仕事を始めたいという関心が出た。
- L2 C4 地域への愛着。
- L2 C5 自治体行政への関心。
- L2 C6 国政や世界、次世代社会への関心。
- L3 C7 社会全体を肯定的に思える。
- *1・*2は、グラフ集計で除外した。
- *3は、変容段階(L) グラフ集計で除外した。

資料3 講座要素(15要素)

a コミュニティを主題にした内容, b 子ども時代の回想, c 人間の生き方の学習, d 多様な価値, e 自己表現, f 創造性, g 作業体験活動, h 分かち合い, i 受講者間のコミュニケーション, j 新たな人の出会い, k 地域を知る学習, l 地域に出た活動, m 講師の講義, n 講座の雰囲気, o 講座後の課外活動交流

アンケート調査は、全項目で「講座によって変容(変化)⁽²⁴⁾

したか」を問い、質問項目を「自分」、「人間関係(つき合い・信頼)」、「社会参加」の3分野で設定した(資料2)。分析では、「自分」をパーソナル・キャピタル評価指標、「人間関係」と「社会参加」の項目を合計してソーシャル・キャピタル評価指標とした。

「長寿社会における生涯学習の在り方について」では、生涯学習の役割として、a 生きがいの創出に資する生涯学習, b 個人の自立と社会での協働に資する生涯学習, c 新たな縁の構築に資する生涯学習, d 健康維持や介護予防に資する生涯学習の4点をあげているが、本質問項目にはこれらも全て含まれている。また、教育・学習へのこまやかな変容と成長を探るために、各項目は、次の3つの変容段階を想定した。Lebel 1 (L1) = 活動や変容が表われる前の「萌芽」段階。Lebel 2 (L2) = 変容が具体的に表われた段階。Lebel 3 (L3) = 思考態度の「熟成」段階。各質問項目で変容があった場合、その要因となった講座要素もすべて選択してもらった

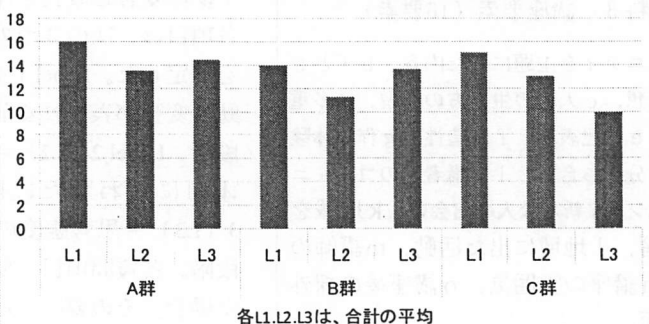
(資料3)。それにより、受講者にとっての講座像を分析する材料にした。

3. 学習によって何が変わったのか？

(1) 変容の「萌芽」をとらえる

はじめに、教育・学習の評価として明らかにされる機会が少ない「変容の萌芽」を考察する。グラフ1は、変容段階を示したものであるが、これまでの学習評価では、「日常事象や他者の話からも学ぼうとする態度になった」(自分/L1)、「以前より、他人や地域を気にかけるようになった」(人間関係/L1)、「全般に、社会への関心と活動する行動範囲が広がった」(社会参加/L1)といった「変容の萌芽」はほとんど注視されてこなかったと思われる。しかし、学習による変容の成果が他人にも見えるようになる段階(L2)の前では、個人の内面でじっくり醸成されていく「萌芽段階」があることが、子どもの学習のみならず、中高年の学習にも作用されていることが作文資料1からも読み取れる。このことは、「今はまだ萌芽状態にあるけれども明日には成熟する機能」というヴィゴツキーの「発達の最近接領域」概念⁽²⁵⁾が、成人学習においても適応できることを想起させる「学習のアンチエイジング現象」と言えるような生涯発達観である。

グラフ1 各群の変容段階合計



作文資料1 (女性, 70代)

特技なし、個性なしの自分にも、何らかの持ち味があることがわかったことです。周囲の方々に刺激を受けます。参加することが何よりのことです。今のところ、主体的に活動するには制約があるので、身の丈に合ったことに係わっております。少しずつ、輪が広がっているところです。いつか、存分に自分を出していきたいと願っています。(波線は筆者)

そのような「萌芽段階」は、講座学習後のどの期間に醸成されていくのであろうか。講座直後か、しばらくしてからか。それを探る手がかりとして、本年度の「すぎなみ大人塾だかしや楽校」では、毎回の講座後、家庭で3段階の学びを次回(約2週間後)までに記してもらうシート(「私のガッコウ・ノート」)を用いている。3段階の学びとは、「計画する学び」(担当者が本時の目標と定めた学習内容)、「生成する学び」(意図していない予期せぬ学び)、「活かされる学び」(さっそく日常生活で活かされた学び)である。

資料4は、ある回後の「活かされる学び」の記述例である。ここからわかることは、同じ講座を受講しても、その後の日常生活で活かされた学びは、

資料4 「活かされる学び」事例

24年度「すぎなみ大人塾だかしや楽校」3回目(6月18日)

- ア「ゴミ箱に投げる前、とりあえず「これは何かに化けるかな」と考えてみることにしました。」(A1)
- イ「孫娘に、単に描く地図でなく、毛糸や色シールなどを使った地図づくりを教えたいと思った。」(A7)
- ウ「他者の思いを受けつつ、どう自分のことを伝えうるか、改めて考える必要あると思いました。」(B7)
- エ「杉並区内の自分が住んでいる地域以外へ出かけた。行ったことのないので興味深いです。」(C4)
- オ「得た情報でさっそく自分で歩いてみた。わからないところもあったので有志で歩いてみたい。」(C4)
- カ「NPOについて調べた。9月にNPOが企画したイベントを友人に教えてもらうよう頼んだ。」(C2)

*文末()は、対応される評価指標、筆者記載

まったく十人十色の個別具体的な内容であることである。それから各人の関心にもとづく学びの広がり、年間講座修了後の各人の人生の多様な学びとして蓄積し発展されることは容易に想像されよう。

とすると、そのような個々人の日常に活かされた学びは、講座中のどこから生まれたのか。各人の「活かされた学び」の誘因になったと思われる講座中の学びの記述を探すと、担当者が用意周到に「計画した学び」からではなく、「ひょうたんからコマ」のように、その場の状況の中で偶然に得た「生成する学び」からつながっていることがわかった（表1、資料5）。

表1 日常に活かされた学びの誘因

	講座2 回分
計画する学び（目的・意図）	2
生成する学び（無意図・創発）	11

資料5 資料4「活かされる学び」事例に対応した「生成する学び」

ア「同じ素材に触れるにしても触れる人の皮膚感覚によって、手触りはきっと様々なのだなと感じました。素材が「何か」に化けていく過程はおもしろい。」
 イ「地図を単に紙に描くだけでなく、毛糸で線路や道路をつくり、色シールでスポットを分類し貼っていくという方法がおもしろく、新しい視点を体験し学べた。」
 ウ「参加者それぞれの意識とテーマの持ち方に違いがあることがわかった。」
 エ「視野が広がりました。自分の住む地域にとらわれず、杉並区内を中心に何かができればよいなあと考えるようになりました。」
 オ「杉並に引越してからあちこち歩いているが、同じように歩いている人がいることを知り、面白かった。」
 カ「コミュニティカフェ設立をNPOにすること。NPOについて知らないし、考えたことがなかった。」

この事実、これまで教育者の立場からとらえられていた、教育者が立案した目的に対して、学習者がどのように到達したかという単線型の「目的一成果」対応の教育システムを、「コペルニクス転回」するような学習像を浮かび上がらせてくれる。つまり、実際は、学習者は教育者の思わくを豊かに逸脱拡散して、共通の一般化された机上の学びの目標は、個々人の状況・関心・個性に応じて、すでに講座時間中に個別具体的な学びとしてとらえられ、それがそのまま講座後の各人の多様な日常生活に活かされ、その後のさらなる

人生の学びの「萌芽」になっていくような学習像である。この視点から学習者の「学びのフロー（過程）」を見ると、例えば、同じように「講座後に地域を歩いた」という2人（エ・オ）も、その後の学習変容の展開に違いが出るであろうことを推測できる（図3）。

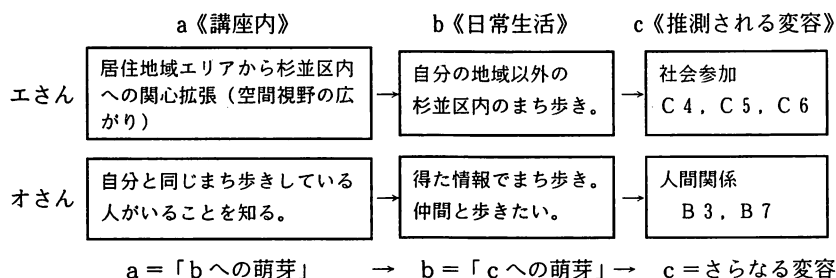


図3 学びのフロー事例（資料4・5より）

前者（エ）は、講座中に自分の住んでいる地域エリアから区内全域に視野が広がり、それを受けて、講座後には地域エリア以外の杉並区を歩く行動をしている。その「杉並フィールドワーク」は、のちに杉並区内エリアで何か活動をするようになった場合（活動の「果実」）には、これが「萌芽」だったことになり、さらに、1年後に調査をした場合、「地域への愛着がより深まった」（C 4）だけでなく、区全域への視野と活動によって「自治体行政への関心がより高まった」（C 5）、さらには「国政や世界、次世代社会についての関心がより高まった」（C 6）という指標（L 2）の変容を促す「萌芽」になる可能性もある。

これに対して、後者（オ）は、講座中に自分と同じように地域を歩いている人がいることを知ったことで、同じ関心者とともに歩いてみたいという気持ちが生じた。それを実現するには、自分から「声かけ」して仲間をつくる必要があるため、「新たな人間関係をつくる関心が高まった」（B 3）、さらには「人づき合いや人間関係づくりのスキルが高まった」（B 7）という変容が期待される。具体的な活動としては、杉並区民というエリア型コミュニティの中で、地域を歩くことに関心あるテーマ型コミュニティ（まち歩き仲間）

が生まれ育ち、それがこの人独自の「多元的参加型コミュニティ」として「醸成」されていくかもしれない。のちにそうなった場合には、今回はその「萌芽」であったととらえることができる。

このように、「何を教えたのか」という教育者の視点からではなく、「何を学んだのか」という学習者（受講者）の視点から学習の変容過程を推測してみると、各人各様の「主観的学習世界の広がり」が相互に影響し合って育まれていく場⁽²⁶⁾が「多元的参加型学習コミュニティ」講座の姿になるのではないかという考えに誘われる⁽²⁷⁾。それは、教育者の立場から計画する、硬直的な「目的・成果」単線型世界観からは見ることができない、極めて生命的で多様性を育む学習フロー観である（図4）。この豊かに広がる学習観をつくり出しているのは、教師の意図以外に働く要因が大きい。「長寿社会における生涯学習の在り方について」では、長寿社会の生涯学習の特徴として、「意図的ではない生涯学習」⁽²⁸⁾が明記されているが、まさに本調査でもこの特徴が浮き彫りにされている。では、この「豊かな無意図的学び」が生まれ出る学習は、どのような講座の要素によって成立するのであろうか。

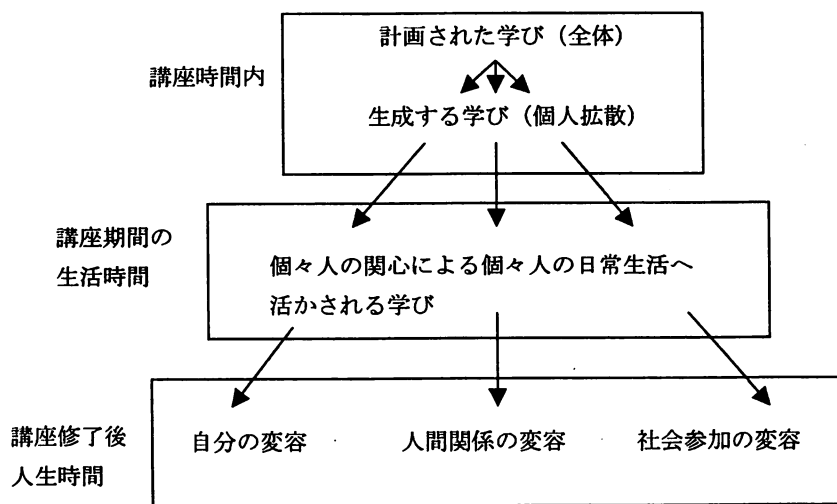
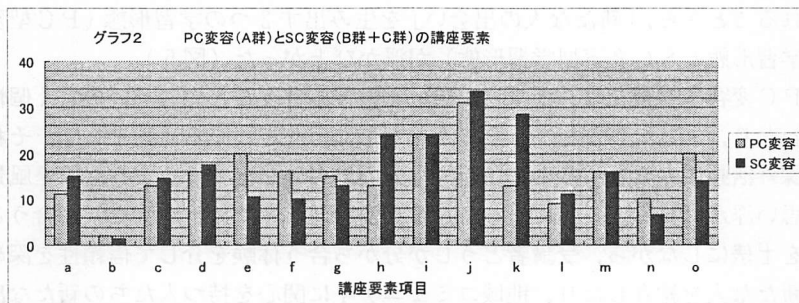


図4 学習者から見る学習フロー観



(2) 受講者から見た講座像

グラフ2は、調査の各変容に対して要因となった講座要素を示した(前論文掲載)。この結果から特筆されるのは、パーソナル・キャピタル(PC)、ソーシャル・キャピタル(SC)双方の変容の講座要因の第一が、「新たな人の出会い」(j)であることだ⁽²⁹⁾。受講者仲間も最初は「新たな人」であるが、その他にこの講座を通して「新たな人」に出会うには、受講者仲間を通して「新たな人」に出会う、地域に出た活動や課外活動を通して「新たな人」に出会う、講座に「新たな人」が参加する、などが考えられる。とすると、「新たな人の出会い」が豊かにある講座とは、少なくとも、小中学校の学級のように、固定した仲間だけの閉ざされた学習集団とは異なる姿が想像されよう。

「新たな人の出会い」以降の講座要素は、PC変容とSC変容に違いが見

図5 パーソナル・キャピタル(PC)／ソーシャル・キャピタル(SC)変容型学習形態

《PC変容型学習形態》要素	《SC変容型学習形態》要素
1 新たな人の出会い	1 新たな人の出会い
↑	↑
2 受講者間のコミュニケーション	2 地域を知る学習
3 自己表現	3 分かち合い
4 講座後の課外活動交流	4 受講者間のコミュニケーション
5 創造性	5 多様な価値
6 作業体験学習	6 コミュニティを主題にした内容

られることから、「新たな人の出会い」を生み出す2つの学習形態（PC型変容学習形態とSC変容型学習形態）が浮かび上がった（図5）。

PC変容型学習では、受講者が自分を表現し合うことでお互いのよく個性がわかり、人となりがわかり合う人とともに何かをつくる活動をして、それが課外活動にも発展する中で、新たな人の出会いが出てくるような講座風景が思い浮かばれる。これに対して、SC変容型学習では、地域を学び合うことを土俵にしながら、受講者どうしが分かち合う体験を介して信頼性を深めて新たな人を紹介したり、地域コミュニティに関心を持つ人たちの新たな出会いがあるような講座風景が思い浮かぶ。

そのように大別してみると、PC変容型学習は「テーマ型コミュニティ学習」、SC変容型学習は「エリア型コミュニティ学習」に通じる対比にもなると言える。年間18回の講座の中で、この2つのタイプの形態が混合しながら実践されてきたと省察することができる。

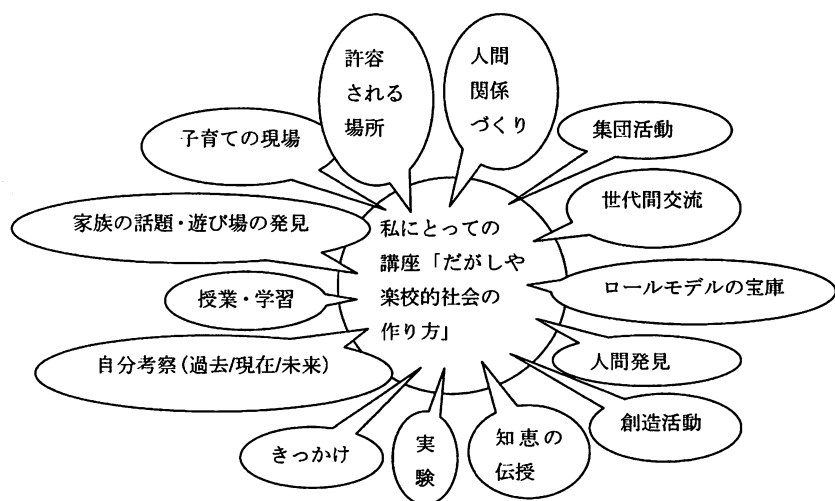


図6 受講者がとらえた講座のイメージマップ事例

平成23年度すぎなみ大人塾屋コース「だがしや楽校的社会的の作り方」講座イメージマップ
作：山根康子（『平成23年度版「すぎなみ大人塾」記録集』杉並区教育委員会事務局
社会教育スポーツ課，2012，43頁）

表2 受講者がとらえた講座のイメージマップからの要素分類

学習 (29)	人間関係 (31)	活動 (27)	態度・感情 (11)	居場所 (6)
興味 アイデア 教わる 教える 人間発見 ...	自己表現 語り合う おしゃべりする 人を知る つながり ...	創造活動 遊ぶ ものづくり 地域活動 他地域との交流 ...	楽しさ 自信 笑い 共に喜ぶ わくわく感を持つ ...	集う 気軽な場 許容される場 遊び場 ランチタイム ...

(11人分) * () 数字は要素数合計、要素は一部例

資料：平成23年度すぎなみ大人塾昼コース「だかしや楽校的社会的な作り方」講座イメージマップより（『平成23年度版「すぎなみ大人塾」記録集』杉並区教育委員会事務局社会教育スポーツ課，2012）

教育者がどのように講座を実践したかではなく、学習者（受講者）がどのように講座をイメージしたかをより明らかにするため、年間講座の最後に、受講者がとらえた講座のイメージマップも描いてもらった（図6）。このイメージマップは、運営者が講座の自己点検をするためとともに、受講者が、自分が受けた講座学習をふりかえりながら、自己の学習を「熟成」させていく意義もあると考える。表2は、このイメージマップ集計分の全要素を5つの項目に分類したもののだが、この結果からも、自己学習や人間関係づくりとさまざまな活動が一体になった講座像がうかがえる。

4. まとめと課題

「すぎなみ大人塾だかしや楽校」の事例を通して、学習者（受講者）の視点から「多元参加型学習コミュニティ」講座像を探ってきた。そこから見出されたことは、教育者の立場から見えづらい、学習の受容と生起が躍動する豊かな世界である。そこから、これまでの成人学習のイメージをくつがえして、「いつまでも発達し、生き生きと活動して新たな人間関係をつくり、社会に関わり続ける成人学習」の姿が垣間見えてきた。「地域社会を積極的に支え

ていく高齢者像」はそこにいるのではないだろうか。その学習世界をさらに探求していくために、以下の研究課題が次に考え出される。①上記の成人学習像の変容過程をさらに個人に即して明らかにするために、個々人の学習変容事例を分析する。②学習変容における「新たな人の出会い」の場面と意義（哲学的な意味も含めて）を具体的に検証する。③各地の成人学習講座の実践と評価の比較検討を行い、評価法と分析法の吟味を計る。④学習者の学習変容をより豊かに促すための成人学習講座の人材育成と専門職の資質研究を進める⁽³⁰⁾。

「すぎなみ大人塾だがしや楽校」の実践は、学校教育のように、教室内で一人の教師が授業を行う在り方ではなく、運営者と学習支援者⁽³¹⁾（教師ではなく）がチームとなって講座を運営し、学習者（受講者）もそのチームに溶け込むようにして、「実践コミュニティ」⁽³²⁾を生み育んでいく姿を体感している。学習方法と一体になったこの実践体制は、これからの成人学習を担う「新たな教育」像を提起しているように思われる。

謝辞

「すぎなみ大人塾屋コースだがしや楽校」の調査については、運営スタッフから全面的に協力いただいた。本論文もこの「実践コミュニティ」の延長上に作成することができた。

注

- (1) http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/24/03/___icsFiles/afildfile/2012/03/26/1318903_1.pdf (2012/8/3取得)。
- (2) 21世紀の生涯学習・社会教育を「元気な高齢者学習」までを含めた視点から展望した先駆的な論文に、佐々木英和「“生涯活躍”とは何か？—生涯学習行政を革新する二十一世紀戦略の基礎理論」（全日本社会教育連合会編『社会教育』2000年5月号、16-23頁）などがある。
- (3) ドナルド・A・ショーン、柳沢昌一・三輪建二訳『省察的实践とは何か—プロフェッショナルの行為と思考』（鳳書房、2007）など。
- (4) 文部科学省生涯学習政策局編『生涯学習政策研究』、2012、悠光堂、pp. 42-53。ソーシャル・キャピタルに関わる文献には、『ソーシャル・キャピタルと〇〇』という題名に表わされているように、様々な分野・領域がソーシャル・キャピタル

の影響を受けることを報告しているが、本研究では、成人個々人のミクロな学習変容の中に、そのような様々な分野につながる方向が見えることを示した。

- (5) OECDは、ソーシャル・キャピタルの対概念としてヒューマン・キャピタルという概念提示をしているが、その指標は教育年数と資格取得とあり(キーリー・ブライアン, OECD編, 立田慶裕訳『よくわかるヒューマン・キャピタル』明石書店, 2010), 筆者はマクロな対概念と解釈したので、ミクロな教育実践からの考察と顔の見える個々人の能力変容を探る本論では、佐藤友美子・土井勉・平塚伸治『つながりのコミュニティ』(岩波書店, 2011)に提起されているこのことばを採用した。
- (6) 個人の健康・生きがいがいつくりと他者や地域社会に寄与する活動が一致することを提起したもので、教育・社会福祉にとって重要な論点になると考えられる。
- (7) <http://www.kyouiku.city.suginami.tokyo.jp/learn/center/otonajuku.html> (2012/8/3取得)。また、松田「発想する! 授業」『社会教育』連載(全日本社会教育連合会)にも実践報告している。特に、今年度の開講記念講演会は、101歳の区内在住の珈琲豆卸売店主が講演し、チラシに掲載された「101歳が語る前向き人生～85歳からのフェアトレード」の演題は反響を呼んだ。これも、超高齢社会に向けた生涯学習の社会的欲求の現れと言えよう。
- (8) 受講者数は、平成21年度15名, 22年度19名, 23年度21名, 24年度24名。
- (9) すぎなみ大人塾『平成23年度版「すぎなみ大人塾」記録集』杉並区教育委員会事務局社会教育スポーツ課, 2012。すぎなみ大人塾昼コース受講生『平成22年度すぎなみ大人塾昼コース「だがしや楽校を開こう!」記録集』同, 2011。すぎなみ大人塾だがしや楽校編集委員会『「縁育て」の楽校』日本地域社会研究所, 2010。
- (10) 生活の実体験(「生まの現実」)にもとづいて書かれた中学生の学級全員の作文を綴った戦後の生活綴方運動の代表作の一つ。無着成恭編『やまびこ学校』青銅社, 1951; 岩波文庫, 1995。
- (11) 超高齢社会における生涯学習の在り方に関する検討会「長寿社会における生涯学習の在り方について」2012, 8頁。
- (12) すぎなみ大人塾だがしや楽校編集委員会『「縁育て」の楽校』前掲, 241頁。
- (13) 松田道雄『関係性はもう一つの世界をつくり出す』新評論, 2009。松田道雄『輪読会版 駄菓子屋楽校』2008『駄菓子屋楽校』新評論, 2002。竹本美恵・田中靖子・丹波恵子『だがしや楽校が未来を救う』ロゼッタストーン, 2006。松田道雄・矢部亨・たるいすみお『だがしや楽校のススメ』創童舎, 2003。
- (14) 駄菓子屋研究から得た人間関係と活動論を一般化した拙著のタイトルは、『関係

性のもう一つの世界をつくり出す』であるが、内容には、つながりづくり、「お互い様」の互酬性づくり、ソーシャル・キャピタルを育むと思われる学習方法論を提起している。「だがしや楽校」についての教育行政からの問い合わせには、ソーシャル・キャピタルということではなく、「地域の教育力」「子どもの社会力」といった教育課題に対応する要請が多いが、考えは通底している。

- (15) 稲葉陽二・大守隆・近藤克則・宮田加久子・矢野聡・吉野諒三編『ソーシャル・キャピタルのフロンティア』ミネルヴァ書房，2011：2012，12頁。
- (16) 大守隆「社会資本（ソーシャル・キャピタル）の概念と地域再生における意義」科学技術・学術審議会資源調査会分科会，2011
(http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu3/shiryo/_icsFiles/afiedfile/2011/11/15/1310883_1_1.pdf 2012/7/13取得)。
- (17) 本年度（平成24年度）の「すぎなみ大人塾」昼コース「だがしや楽校を開こう！」の副題「人が、地域が生き生きしていく「和」のコミュニティ学習」にその思いを込めている。
- (18) <http://www.caa.go.jp/seikatsu/shingikai/kikaku/report19.pdf>（2012/8/3取得）。
- (19) 国民生活審議会総合企画部会報告書「コミュニティ再興と市民活動の展開」2005，6頁。
- (20) J.W.クレスウエル，V.L.プラノクラー，大谷順子訳『人間科学のための混合研究法』（北大路書房，2010：2011），川口俊明「教育学における混合研究法の可能性」『教育学研究』（第78巻，2011，52-62頁），など。
- (21) 平成22年度，23年度，全8回（筆者学習支援参加4回）。平成24年度，全10回予定（筆者学習支援参加4回予定）。アンケート調査回収数はまだ少ないので，考察者の「すぎなみ大人塾」との比較参考に留める。
- (22) http://www.mext.go.jp/a_menu/kyoikuhi/chousa/1307886.htm（2012/7/14取得）。
- (23) 前論文・本論文では，ソーシャル・キャピタルの結束型，橋渡・連結型といった形態につながる調査指標は配慮したが，分析考察までは言及していない。
- (24) 成人学習の理論では意識変容をめざす変容学習論があるが，ここでの「変容」は，教育一般で問われる「学習によって何を学び，何が変化したか」を問う。
- (25) ヴィゴツキー，柴田義松訳『思考と言語』新読書社，2001：2006，297-303頁。
- (26) 「主観的世界の集合」という概念は，ヤーコブ・フォン・ユクスキュル，ゲオルク・クリサート，日高敏隆・羽田節子訳『生物から見た世界』（思索社，1973：岩波文庫，2005）による。
- (27) 学習者の視点で教育を捉え直す試みは，大学の授業でも行った。拙稿「学生た

ちの100の授業—自分・感覚・思考・活動・仲間』『こども芸術教育研究 vol.2』（東北芸術工科大学こども芸術教育研究センター，2007，13-26頁），拙稿「なぜ，これが教育なの？—活動変容・生活混合学習の可能性」同，27-42頁。

- (28) 前掲「長寿社会における生涯学習の在り方について」2012，5頁。
- (29) 同じ分析を「しもつけ大人塾」でも行い同じ結果が出た。「新たな人の出会い」は，成人学習のキーワードになる可能性があると考えられる。
- (30) 成人教育を研究対象にしている前論文，本論とも，ここまで，あえて成人教育分野の先行研究に触れてこなかったのは，人類が初めて直面する超高齢社会への成人教育を構想していくために，これまでの成人教育論の「色眼鏡」にとらわれず，学際的に幅広い分野からの知見を取り込みながら，実際の成人学習講座の実践創造から探求しているためであるが，成人学習の専門職への研究考察の段階では，成人教育の先行研究をとらえていきたい（パトリシア・A・クラントン，入江直子・三輪健二監訳『おとなの学びを創る』鳳書房，2004，など）。
- (31) 「学習支援者」という名称には，学習内容を教える「教師・講師」ではなく，市民の主体的な学習活動を支援していく専門担当者という意味合いが込められているが，この視点は，本論の講座像の調査からも妥当性が示されたと言える（「講師の講義」中心の学習像ではないこと）。
- (32) ジーン・レイヴ，エティエンヌ・ウエンガー，佐伯胖訳『状況に埋め込まれた学習』（産業図書株式会社，1993：2005），エティエンヌ・ウエンガー，リチャード・マグダーモット，ウィリアム・M・スナイダー，野村恭彦監修，櫻井祐子訳『コミュニティ・オブ・プラクティス』（翔泳社，2002：2005）。